音楽学部の学生のための美術講座
――物質と光（Ⅰ）－２

小林英樹　愛知県立芸術大学美術学部名誉教授（油画）

はじめに

フェルメールの代表作の一枚《レースを編む女》は、やわらかな光があふれ、明るい中間色のなかで透明感ある赤、青、黄が心地よく響き合っている。２４センチ×２１センチの小さな画面、本論では、フェルメールを《レースを編む女》の制作に駆り立てた注目すべきひとつの要素に的を絞り解説していく。

なお、２０１６年発行のミクスト・ミューズ No.11『物質と光（Ⅰ）』の最後に、「続編は次回」と書いた。続編（Ⅱ）ではセザンヌを中心に解説する予定であったが、その前にフェルメールのなかで触れておかなければならない作品を落としていたので予告を変更し、物質と光（Ⅰ）－２というかたちで割り込ませてもらった。なお、本論は No.11『物質と光（Ⅰ）』を読んでいない方でも支障なく読めるようになっている。

１．フェルメール作品の大きな流れ

フェルメールは、２０歳台中頃までは大きなキャンヴァスの宗教画なども描いていた。しかし、スペインからの独立戦争の立役者でもあり、それまで代々デルフトに君臨してきたオラニエ家の衰退という時代的変化のなかで、フェルメールもまた裕福なデルフト市民の間で高まりつつあった居住空間を飾れるサイズの、いわゆる風俗画と呼ばれるジャンルの絵画の要求に応えるようになっていった。

オランダの気候風土が作り出す白く透明な空気を通過した光は街や室内を独特な色彩でいろどる。２０歳台後半の作品《牛乳を注ぐ女》や《デルフトの眺望》などでは、その光が降り注ぐ空間に展開する顕な物質の表現に意欲を注いだフェルメールであったが、徐々にではあるが、微妙な陰影によって色彩を際立たせ、空間を演出する光そのものに興味の中心が移行していく。

しかし、フェルメールにとって、生涯、宇宙の万物を構成する物質の世界に対する興味が消えることはなかった。《牛乳を注ぐ女》から１０年余りが過ぎた３０歳台後半、それまでの作品では見られない斬新な発想と手法で、物質が際立ち、光が輝く新たな世界を描き出した。《レースを編む女》である。

２．キャンヴァス地そのものの造形的美

現在でも基本的には変わらないが、１７世紀、油彩画は、板や布などの基底材にサイズといわれる膠などのコーティングをした上に地塗りをし、下地、彩色というプロセスを踏んで制作されている。なお、フェルメールは、《真珠の耳飾りの少女》に見られるように、載せた絵具の発色がよく硬質なマチエールを作り出せるセリューズ地と呼ばれる、乾性油で練った鉛白の地塗りを好んで使っていた。

だが、今回この作品で注目すべきは地塗りではなく、良質な麻糸が織り成す地塗りを施したキャンヴァスの物質的表情である。

キャンヴァスの基底材である麻布は、他の布と同様、緯糸（よこいと）に直交するように経糸（たていと）を交差させて織られている。隣り合う経糸が互い違いになってそれぞれぴんと張られた緯糸を上下にかいくぐるようにロール方向に織り進んでいく。直線的に張られた緯糸には引っ張られてもこれ以上伸びる余地はないが、経糸には、波打っている分、わずかではあるが伸びる余地がある。

キャンヴァスの表面には織りによって無数の山と谷が出現する。山に見えるのは緯糸の上にある経糸であり、谷に見えるのは緯糸であり、経糸が緯糸の下、つまり、布の裏側に山を作っている部分でもある。このように、表面、裏面ともに布表面の山はすべて経糸が作りだすものである。

乾性油の浸潤を防ぐための膠を塗り、その上に地塗りしてキャンヴァスが出来上がることは先に述べたが、《レースを編む女》からは、フェルメールが二次元的世界に極めて近いキャンヴァス表面のわずかな凹凸に注目し、その特徴を生かして何かできると閃いてこの作品の構想が始まったことが想像できる。

《レースを編む女》では緯糸の谷、あるいは平野の上に広がる経糸の山が作りだす織り特有の幾何学的世界が作品の重要な構成要素になるだろう。《デルフトの眺望》はじめ、それまでの作品でも理数分野の着眼点と発想が際立つフェルメールであったが、今回の着想はさらに従来の絵画の常識では考えられないような意表をついた要素が加わっている。完成像のイメージと制作プロセスは決まった。

３．異なるバイアス角度

経糸は緯糸より太く幅広である。それにもかかわらず、布の表面に現われる山頂を結んでできる最小の四角形は、なぜか縦長の菱形である。

なぜだろうか。「２」の織り方の説明で少し触れたが、緯糸そのものは細くても、経糸は山、谷、山の行程をとるために緯糸を斜めにかいくぐらなければならない。その分だけ長くなってしまうのである。

手許にある細目、中目、太目の各キャンヴァスを拡大鏡を使って測ってみると、山の頂点を結んでできる最小の菱形の縦横の対角線の比は約４対３、約５対４、約８対７などとその比はまちまちだが、どれも縦長になっている。もちろん、緯糸を上下方向にして木枠に張れば菱形の見え方は横長になる。

ところが、経糸が上下方向に張られている《レースを編む女》では、この四角形は縦長の菱形ではなく正方形なのである。緯糸をくぐって出来る山から山までの距離と、一本隔てた隣の経糸の山までの距離が等しいのだ。理屈では緯糸を細くすれば簡単にできそうだが、布の強度を考えると簡単にはいかない。

菱形の縦横の対角線の長さの比が４対３であれば、菱形の辺が作る、いわゆるバイアス角度といわれているものは tan4/3 で約５３度だが、《レースを編む女》は正方形なので対角線の長さが同じ、つまり、バイアス角度は tan1/1 で４５度である。そのため、《レースを編む女》は４５度に傾けた方眼紙に真正面から向き合っているような感じに見える。

彩色した絵具がキャンヴァスの織り目を完全に覆い隠してしまう作品ならこのようなことを問題にしてもほとんど意味はない。しかし、最初から最後まで山と正方形、とくに点々で現われる山の存在を念頭に置き注意を払って制作したと思われるこの作品の場合は、しっかりそこに注目しなければならない。

画面全体に確認できる等間隔で直線的に並んだ山と谷の創り出す造形と、絵具で覆い隠されてはいるが、その下にある山と谷の気配をはっきり残そうとしている神経が、フェルメールの確固たる意思を伝えている。そして、美しい織りのキャンヴァスと、二方向のバイアスを４５度一直線に揃えた張り方が、作品に静かさと理性的な世界を与えることに役立っている。

4．物質と光が融合した世界

画面下三分の一ほどを占める海のような群青の領域に明瞭に姿を見せる山々は基本的に絵具を剥ぎ取って一回で決めたものか、描き込みながらもその印象を最後まで残したものである。

しかし、画面上半分の山々の白っぽい点々は、計画通りなのだが、一度中間色の明るい絵具で描いた上から、細筆の穂先などを使い山々を彷彿とさせるようにタッチを置いたものである。画面全体を見渡してみると、このように後からフェルメールの手によって描かれた点々の方が圧倒的に多いことがわかる。

そして、部分図からわかるように、人物や衣装の濃淡に合わせたこれら無数のタッチは必ずしも忠実に山をなぞるっているわけではなく、造形上の効果を

優先させ、所々微妙に大きさや間隔などを変えていたりする。所々、タッチがつぶれて谷を塞ぎ隣の山と一続きになっているところもある。

それらをコントロールする細やかな神経からは、バイアス角度４５度のキャンヴァスにこだわった理由もうなずけるし、幾何学的美しさをフォルムとして生かし、さらに、光と融合させ、光でも物質でもない、あるいはその両者でもあるものに昇華させようとするフェルメールのこだわりが伝わってくる。

女性の顔なども無数の点で覆われているが、うつむいてレースを編む女性の顔や作業する指の表情などは可能な限り整理され、単純化されながらもふくよかな表情が描き出されている。基本的にすべての色面に点々を密集させて描くことを前提にしていながら、肌、髪の毛、女性がまとう様々な布の微妙な質感の違い、表情の違いが失われることがない。

時々話題になるが、手前のテーブル上の群青のクッションから垂れる赤い糸はボーっとしていて焦点が定まらない画像のようである。三次元空間内に存在する物質に、あえて、陰影や濃淡だけではなく遠近感すら与えない。ただそこに塗られただけの赤い色はキャンヴァス上で明快な位置をもたず、物質と光との境界すら失いかけている。それが、画面中央の目立つ場所に「無造作」に貼り付けられている。質感はおろかフォルムも空間的な位置も曖昧なのだが、なぜか不思議な輝きを発している。

視点を変えて見てみよう。フェルメールは、微妙な女性の体の動きをこの作品の構図的要素の中心に据えている。その動きを、頭髪、右腕の服の皺へと伝え、クッションの大きな明暗のコントラストでその動きを受け止め、収束させてから、その先の白い糸、赤い糸へと有機的につなげている。

さらに、そこまでの曲線的な流れはテーブル面上にゆったりと広がり、最後はテーブルの角から画面中央下まで一直線に下降する布の動きによって締めくくられている。緩急織り交ぜた構図上の流れのなかで見ると、赤い糸が重要な役割を果たしているのがわかる。空間的に定かな位置を与えられていないように見えていた赤い糸であったが、視点を変えると完全に納得がいく表現になっていたことがわかる。

おわりに

平面上に三次元空間を合理的に表す透視図法の大成者の一人、レオナルド・ダ・ビンチには、純然たる二次元空間である漆喰の壁の染みを見て様々な像や世界の広がりが感じられるといった趣旨の話が伝わっている。エピソードとはいえ絵画についてのレオナルドの本音を伝えている。

レオナルドに限らず、優れた画家たちは、洋の東西を問わず、絵画は三次元空間を忠実に写し、再現する手段や場ではなく、画家の内なる世界を表現し、平面独自の空間性を追究するものであることがわかっていた。自分独自の平面世界をどうしたら表現できるか、つねにそれを考えながら制作していた。

本論ではフェルメールがキャンヴァスの織り目に注目し、そこから構想が始まったことについて述べてきたが、その着想を生み出した根源には、フェルメールの内的世界の表現に加え、誰もやったことがない新たな平面空間創出への密かな挑戦の意識があった。《レースを編む女》はまさにそんな意識の結実した一枚である。

フェルメールは、光が作り出す世界を直視した画家ということで印象派の先駆者的位置づけが与えられることもある。しかし、もっと広く深いところで、平面とは何か、どこまで可能かということを常に考えていた、絵画的表現に対して永遠の問題提起をしていた画家としてとらえたい。